



しゃらく旅リハ倶楽部とは…

体が思うように動かない…。

出かけたくても、出かけられない…。

介護付き旅行のお手伝いという仕事をしていると、よく耳にする声です。

が、「体が動かない」「出かけられない」というのは、誰が決めることなのでしょう。

しゃらくはこれまで、のべ1,200人以上の「体が思うように動かない」方々のお出かけや旅行をお手伝いしてきました。普段ご自宅や施設に暮らす方々も、外に出た途端に表情が変わり、普段では考えられないような積極性や、到底できないと思われていた体の動かし方ができる、そんな例を私たちは数々目撃してきました。

お出かけには、旅には、大きな力がある。これは私たちしゃらくスタッフ全員の信じて疑わないところです。この大きな力が、介護度の比較的低い方々にとってはさらに大きな力となり、日常生活そのものを変えられるような持続的な効果をもたらすのではないかと——この想いが原点となり、このたび「しゃらく旅リハ倶楽部」の立ち上げに至りました。

「旅は最高のリハビリ」。私たちが活動を開始した当初から掲げてきた合い言葉です。旅リハ倶楽部の立ち上げ構想段階で、私たちは何人かの理学療法士さんやお医者さんにアドバイスをいただきました。そしてそこで知らされたのは、リハビリテーションとは単なる肉体的なトレーニングにとどまるものではないということでした。たとえば筋力を増強すれば手足は動く、それは理屈ですが、その前段階にもっと大切なプロセスがあるはず。それがすなわち、本人の「やる気」なのだとということを教えられたのです。

身体機能的には十分動けるだけの潜在力があっても、本人に「動こう!」という意思がなければ体は動かない、それは健常者でも同じことです。要支援者、軽度の要介護者が口にする「私は体が動かないから」という言葉の裏には、そもそも本気で動いてみることにするあきらめがあるのではないかと。「長年出かけていないから、どうせ無理だ」「もし思い切っておかけたところで、周りに迷惑がかかる」。こうした思いから、せっかくのお出かけに十分堪えるだけの身体力のある方が、うちに引きこもっているのではないかと。それならば、「大丈夫!」というメッセージをしっかりと伝え、大丈夫な環境を作り上げることで、たくさんの方々が「動ける!」ようになるのではないかと。

神戸市内のケアマネジャーさんを対象に実施したアンケートからは、担当されている利用者さんのうち、女性では実に7割が引きこもりがちでうつ状態に近い境遇にあることが浮かび上がりました。このサービスを必要としている方は、私たちが想像しているよりずっとたくさんいる! そこで私たちは、本格立ち上げに先立ち、無料モニターツアーの実施に踏み切りました。

これはツアーに参加された11人のモニターの方々の、勇気に満ちたチャレンジの記録です。



モニターツアー概要

対 象 者

- 主に要支援1～要介護2の、自力歩行が可能な方(杖・歩行器等の利用可)
- リハビリとして旅を楽しみたい方

ツアーの形

- 5名1グループの団体ツアーとする
- 4回の日帰り旅行を1セットとし、原則として全回にご参加いただく
- 介護タクシーがご自宅までお迎え／お送り

行 程

モニターのみなさまには2グループにわかれていただき、4回の日帰り旅行にご参加いただきました。

グループ ①

第1回 2012年11月19日
「よしもと新喜劇で笑う!」



第2回 2012年12月3日
「大仏さんとお対面!の奈良」



第3回 2012年12月17日
「倉敷美観地区 しっとり散歩」



第4回 2013年1月9日
「カキ料理満喫!の赤穂」



グループ ②

第1回 2012年11月21日
「よしもと新喜劇で笑う!」



第2回 2012年12月5日
「淡路島 花とえびせん散歩」



第3回 2012年12月19日
「カキ料理満喫!の赤穂」



第4回 2013年1月11日
「大阪海遊館 童心に帰る海中散歩」



参加者の表情

ご参加いただいたモニターの方々にどんな変化が起こったのか。
ずっとご一緒させていただいた私たちには一目瞭然でした。



参加者の声



参加前

出発前は、とにかく不安だった。緊張もあった。

みんなで相談して決めたこととはいえ、行き先が決まった時、「遠いな」と思ったことはあった。

一緒に行く方の介護度や身体の状態がどれくらいなのか、それが一番不安だった。

これまででは婦人会など大きな団体ばかりで、小グループでの旅行はこれまでなかったの、知らない人と一緒に行くことに最初は緊張した。

先のことはわからないので、本当に4回とも休まず行けるかなあという不安はあった。体がもつかい酒だったし、次に行くまでに体調を崩さないよう、気を遣った。

一人ではあんな人ごみは無理。人ごみに出るのはこわかった。

参加
してみ

1回行ってみて、だいぶ不安が和らいだ。

実際に行ってみると、しゃべっている間にすぐ着いたという感じで、疲れはさほどなかった。歩く距離にも不安はあったが、義務感で歩くのではないから、楽しく歩くことができた。

お会いして「みんな同じだ」とわかり、安心した。

最初の一步をどう踏み出すかが重要だと感じた。外へ出かけるにはいろいろな形があるが、今回はその方法や感じが合う人たちと一緒にできたから、うまくいったと思う。

4回行けた!という達成感はすごくある。この体、この年齢になってこれだけできたことは、友達に自慢できる。色々な人に体験してもらいたい。

スタッフに付き添ってもらえれば、人ごみも「行ける」と思えた。

歩けるのが一番だと実感した。お医者さんがいつも歩け歩けと口にするの意味がわかった。

周囲の声

ご家族やケアマネジャーさんなど、参加者を普段から見つめていらっしゃる立場の方々にも、旅の前後でどんな変化が起ったか、お聞きしてみました。

- 亡くなった奥さんのことを口にすることが減った。少しの時間でも気を紛らすことができています。
- 今回の旅を通じて、自分の居場所があることを感じる事ができたのではない。本人の「ところが動く」感じがした。
- 2回目以降、出発前は自発的に用意をするようになった。
- 旅行に行く前より会話が増え、表情が明るくなったように感じる。
- 次の行き先の話や行ってきた感想を、楽しそうな笑顔で話してくれる。



参加者の心理的变化



事後アンケート結果

回答者: 10名

1. 行く前にはどんな不安がありましたか?【複数回答可】

他の人に迷惑をかける	40%
階段・段差	40%
トイレ	30%
体力	30%
歩くペース	30%
車の移動	30%
全4回参加できるか	30%
人間関係(会話に入っていけるか等)	20%
特に不安はなかった	10%
その他	20%

2. 実際に行ってみて、この不安は解消されましたか?

解消された	50%
ほぼ解消された	50%
解消されなかった	0%

3. 旅行に行く前と行った後で、気持ちにどんな変化が起きましたか?【複数回答可】

話題が出来、友達や家族との会話が aumentata	60%
明るくなった	30%
特に変化はなかった	30%
以前より活動的になった	10%

4. 外出して歩くことについて意識は変わりましたか?

あまり変わらなかった	60%
外出への抵抗が薄まった	30%
外出をおそれなくなった	10%

5. 期間中、次の旅行の予定があることで、生活にハリができましたか?

ハリができたと思う	80%
どちらともいえない	20%
あまり変化はなかった	0%

6. 4回の旅行で何が一番楽しかったですか?

仲間との会話	80%
観光	20%

7. 4回の旅行で何が一番しんどかったですか?

歩くこと	30%
車での移動	10%
知らない人たちとの同行	10%
しんどかったことはなかった	50%

8. 今回の旅行でお仲間になった方々と、また会いたいと思いますか?

ぜひまた会いたい	50%
機会があれば会いたい	40%
どちらでもよい	10%
会いたいとは思わない	0%

9. 同様の旅行があれば、また参加してみたいですか?

参加したい	80%
どちらでもよい	10%
参加したいとは思わない	10%

モニターのみなさまには、旅への参加を通じて心理面でどのような変化が生じたか、「緊張」「抑うつ」「怒り」「活気」「疲労」「混乱」の6つの尺度から気分や感情の状態を測定するPOMS(TM)という検査にご協力いただき、専門家に結果を分析していただきました。

旅を継続的にするという事は、日常の中にハリが出、楽しい外出、新たな出会いで仲間が出来る喜びやで、イキイキと生きる活力が増す(ポジティブ尺度が上がる)ことが立証できたと思います。

逆に、ネガティブ尺度が全般的に下がっているという結果が出ています。

単純な日常生活の中での不安や緊張を始

めとする抑うつ・怒り・疲労・混乱が全般的に下がる結果を導き出すことが出来ました。

今後、春や秋の気持ちの良い季節に、自然の美しさや自分ではおよそ思いつかない『旅』の予定をコンスタントに持って頂くことで、心身共に健やかで後半の人生に花を添えることが出来ると確信が持てます。



臨床心理士 福本 裕子

(特定非営利活動法人オーガニック・ライフ・コラボレーション代表)





モニターツアーを終えて

しゃらく旅リハ倶楽部
担当 国本 豊泰



モニターツアー終了後に実施したアンケートは概して好結果でした。そもそもこの手のアンケートはあまりネガティブな結果が返ってこないものではあるし、特に今回は無料でご招待した方々だったのでなおさらなのですが、そうした点を割り引いて見ても、このたびの結果には特筆すべき点がいくつか認められます。

最も注目したいのは、大半の方々が、4回のお出かけを通じて「生活にハリが出た」と感じてくださったことです。

普段で自宅や施設から外へ出る機会の少ない方々にとって、日帰りとはいえ4回の旅行は大きな冒険に違いありません。出発前には様々な不安があったことも、アンケート結果に如実に表れています。が、それでもその不安を一生懸命、時には少しだけ無理もしながら、克服した方々が、生活全般という幅広い意味合いで好転の印象を持てくださったことは、私たちにとって大きな励みとなりました。

もう少し焦点を絞って、この一連の旅の中でみなさんが何に魅力を感じてくださったかを見てみると、やはり顕著なのが、「仲間との会話」を最も楽しかったと感じている方々の多さです。旅行後、「会話が増えた」など周囲とのコミュニケーションに関する面で変化が起きているのもこれと無縁ではないでしょう。旅リハ倶楽部の提供するの、あくまで旅行サービスですが、旅を通じて参加者が生活にハリを感じるよ

うになる最大の要因、ひいては普段の暮らしに生きがいを見出すための最大のポイントは、一時的な物見遊山などという娯楽ではなく、継続的な他者との関わりなのでしょう。

慣れない外に出ることは誰しも怖い。よほどの覚悟がなければ、多少ハリがなくなるとも波乱もない、日常のあり方に敢えて変化を加えることは難しい。募集時点では参加希望者の数が思わしくなかったのですが、それもまさにこの点に起因するのかもしれませんが。「外に出るなんて、考えるまでもなく無理に決まっている」。この感覚のいかに根強いことか。しかし反面、思い切ってこれまでの暮らしを変える決断をした方々の得た「行ってみたら変わった」という結果もまた、何と大きなことか。

たった4回では、外出を臆さなくなったという明確な意識が生まれるまでには至らなかったようです。しかし、人と関わり、言葉や笑顔を交わすよろこびを取り戻した参加者には、確実に「外の世界」への志向が生まれています。本格始動に向けては細かい点で課題も山積みですが、私たちはこのサービスを必ず軌道に乗せたいと思っています。小さな一歩ではありますが、こうしてこのモニターツアーの成果をご覧いただいているみなさまには、どうか周りにおられる旅リハ倶楽部メンバー候補の方々が、大きく困難な決断を下すための応援をしていただければと、心から願っています。



「私達がお手伝いします!」



小倉 譲

エスコートヘルパー (ホームヘルパー 2 級)
介護タクシードライバー (普通自動車第二種免許)



須貝 静

エスコートヘルパー (ホームヘルパー 2 級)
プランナー (総合旅行業務取扱管理者)



国本 豊泰

プランナー (総合旅行業務取扱管理者)
介護タクシードライバー (普通自動車第二種免許)



辻 明代

エスコート医療ケアスタッフ (看護師)
介護タクシードライバー (普通自動車第二種免許)



樋口 昌代

エスコートヘルパー (介護福祉士)
プランナー (国内旅行業務取扱管理者)

貸切
タクシー

ヘルパー付き介護タクシーで

ゆったりお出かけしませんか?

- ✓ 車いすでも安心!!スロープ完備!
- ✓ 乗降もラクラク!!自動乗降システム
- ✓ ステップ付きで足元も安心!
- ✓ 車いす貸出無料!!



トヨタノア 車いす 1台 +4人まで同乗可能です。 **キャラバン** 車いす 1台 +7人まで同乗可能です。

ヘルパーも同乗可能です。お気軽にお問合せください。

旅をあきらめない。

兵庫県知事登録旅行業 2-628 号 (社) 全国旅行業協会 正会員

Non Profit Organization
特定非営利活動法人 しゃらく

<http://www.123kobe.com>

しゃらく旅倶楽部

検索



〒654-0071 神戸市須磨区須磨寺通4-4-6 須磨浦ビル204号室

TEL 078-735-0163

FAX 735-0164

E-mail sharaku@123kobe.com

第3集

旅をあきらめない。

旅は最高のリハビリ



Non Profit Organization
特定非営利活動法人 しゃらく

旅は最高のリハビリ

「旅をあきらめない」「旅は最高のリハビリ」をコンセプトに、介護付添旅行サービスを提供してきて丸5年が経ちました。この5年間で、私たちがコーディネートさせて頂いたお客様は総数1,200人を越えました。これもひとえに、神戸を中心とした関西全域のケアマネジャー様や地域の皆様からのご支援ご厚情の賜物と深く感謝申し上げます。

私たちのサービスは介護保険法の制度上では利用できない「旅行」や「お出かけ」がメインです。利用される方々は、要支援～要介護2までの軽度の方から要介護3～5といった重度の方、また酸素吸入、胃ろうや嚥下障害など、移動や外出に様々な配慮が必要な方まで幅広くおられました。行先も外出の理由もまた様々で、近くのデパートからご自宅への帰省、お孫さんの結婚式、お墓参り、観光など、北は北海道から南は沖縄まで、時には海外旅行のご対応もさせて頂きました。そして、「これが最後の旅行になるかなあ」とおっしゃりつつ、一度私どものサービスをご利用頂いたお客様の80%以上の方が、リピーターとして帰って来て下さいました。そこには、「旅をあきらめなかった」お客様の、旅によっ

て心が元気になり、前を向いて生きようになった結果、また旅に出る——そんなお姿がうかがえます。旅は最高のリハビリになる、その何よりの証です。

私たちは、「旅は最高のリハビリ」になることを更に社会の皆様知って頂きたい、利用して頂きたい、そして元気になって頂きたいと願い、様々な準備をして参りました。神戸市内の多くのケアマネジャー様にご協力頂き、要支援～要介護2までの方の日常生活の調査を行いました。すると多くの高齢者の方々が引きこもり気味になり、中にはうつ病になっている方も多くおられることがわかりました。そんな方々の日頃のリハビリも大切ですが、それに加えて心が元気になる、外出したくなるプラン、「しゃらく旅リハ倶楽部」サービスをこの2013年4月にスタートさせます（詳しくは後述）。このサービスによって、地域の皆様に少しでも元気にしていければと考えております。

これからも、皆様のお力添えを宜しくお願い申し上げます。

特定非営利活動法人しゃらく

代表理事 小倉 譲



旅をあきらめない。

第3集

目次

- 04 旅行の事例 ① 『長年の約束を果たす沖縄 1泊2日の旅』
- 06 旅行の事例 ② 『最後になるかもしれない同窓会』
- 08 旅行の事例 ③ 『いつまでも自身を磨き続ける人生
そのお手伝いをさせていただける幸せ者の目から』
- 10 旅リハ倶楽部 しゃらく旅リハ倶楽部とは・・・
- 11 旅リハ倶楽部 モニターツアー概要
- 12 旅リハ倶楽部 参加者の表情
- 13 旅リハ倶楽部 参加者の声
- 14 旅リハ倶楽部 参加者の心理的变化
- 15 旅リハ倶楽部 モニターツアーを終えて



【発行】 特定非営利活動法人しゃらく

【発行人】 小倉 譲

【編集・装丁】 特定非営利活動法人しゃらく

※本冊子に掲載されている写真、イラストレーション、および記事の無断転載、使用を禁止します。



旅行の事例 ①

お祖父さんの名が刻まれた慰霊塔へ 長年の約束を果たす沖縄 1泊2日の旅

「姪を沖縄の慰霊塔に連れて行ってあげたい」。一本の電話から今回の旅は始まった。

生まれた時から重度の小児脳性麻痺だったIさん。大好きだったおばあさんと、小さい頃から「おじいさんが眠っている沖縄の慰霊碑に行こう」と約束をしていた。その夢は、おばあさんが亡くなってからもずっと諦めていなかった。去年、体調を崩し、医者からも「行くな今しかない」と言われたIさん。依頼の電話を下さった叔母さまの声からは、「何としても連れて行ってあげたい」という思いが伝わってくる。

ずっと寝たきりを余儀なくされているIさん。移動の間、車椅子で何時間も過ごすことができるのか？ 飛行機の座席で座位を保てるのか？ 気圧の変化に対応できるのか？ 何より、体力的に大丈夫なのか？

問題は山積みだった。しかし、Iさんを

一番近くからずっと見守ってきたお母さまからも、「今しかない。ずっと目標にしていた沖縄だから」と強く訴えかけられ、私たちも「何としても叶えてあげたい」という気持ちにさせられた。

担当の看護師さん、理学療法士さん、作業療法士さんと綿密な打ち合わせを重ね、沖縄での緊急受け入れ先病院も手配した。Iさんは出発までの短い間に、理学療法士さん達と共にリクライニング車椅子で過ごすリハビリを重ね、無事に旅行当日を迎えることができた。

介護タクシーで到着した伊丹空港で、叔母さまとも合流。お会いするなり「本当に行けるなんて信じられない。ありがとうございます」と涙を流された。一番の心配だった飛行機移動も問題なく、ついに念願の沖縄へ到着。リクライニング車椅子が降





機口に到着するまでの間に、「記念に写真を撮りましょう」とカメラを向けた瞬間、得も言われぬ素晴らしい笑顔を見せてくれた。それまでずっと、どこか不安げな表情だったはさん。しかし、その笑顔を目にした瞬間「来れてよかった」と心の底から思った。

空港から介護タクシーに乗って、そのまま慰霊塔へ。お母さま、叔母さま、そしてスタッフの全員でおじいさんの名前を探し当て、献花した。Iさんもこの上なく穏やかな表情だった。

ホテルに行く道中、お母さまがそっと教えてくださった。「去年に唯一コミュニケーションに使えていた手を骨折して使えなくなって以来、あの子から笑顔が消えたのよ。それまではよく笑ってくれていたのに。沖縄に来ることも諦めていたのよ」。Iさんは、車窓に映る景色をその目に焼き付けるかのように、じっと眺めていた。

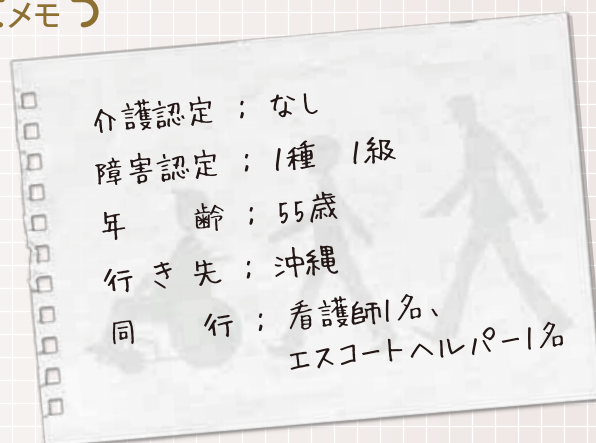
エスコートヘルパー 樋口 昌代



行程

- 1日目 同行スタッフがお迎え
病院出発
伊丹空港到着
那覇空港到着
摩文仁の丘 慰霊塔
ホテルロイヤルオリオンにご宿泊
- 2日目 ホテル出発
那覇空港到着
神戸空港到着
ご自宅到着

メモ





旅行の事例②

郷土愛、12年ぶりに訪れる徳之島へ 最後になるかもしれない同窓会

脳出血の発作から8年。以来、どこに行こうという目的もなく、ただ不自由になってしまった体を少しでも良くするために、毎日リハビリを頑張る日々。

そんなある日、一通の知らせが届いた。「最後の同窓会」の招待状だ。

これが最後になるのなら、何が何でも行きたい。神戸から遠く離れた徳之島に、友人に会いに行きたい。

そんな思いから始まった今回の旅。12年前に行った徳之島と今回は違う。今は、要介護4の身体になり、立位をとることは何とか出来るが歩行は難しい。車いすの移動以外にも多くの介助が必要になる。勝手知ったる故郷徳之島行きも、自分で何でも出来た時と違い、今では大きな不安がある。だから、半ば無理だろうと諦めていた。

ケアマネジャー様からしゃらく旅倶楽部

のことを耳にされ、連絡を頂いた。電話の向こうの声からは、希望と不安の入り混じっていることが容易にわかる。帰りたい、でも本当に帰れるのか…。そんな気持ちを察した私は、はっきり「帰れます」と伝え、お客様のもとに足を運んだ。

準備は数カ月前から始まった。ご本人様やケアマネジャー、理学療法士との打合せを重ね、現地のエレベーターから部屋、お風呂にトイレの状況の把握を行い、時間をかけながらお客様の不安を一つずつ減らしていく。

出発の日には雲一つない晴天。不安はある。それを押し殺しつつ、介護タクシーで伊丹空港に向かう。空港到着後も車いすの乗換えや飛行機の座席への移動など、乗り越えなければならないハードルはいくつも存在する。それを越えて無事に徳之島





空港に到着したとき、お客様の無言ながら最高の笑顔を私は見逃さなかった。ホテルまでの道中、徳之島という土地のこと、昔と今の違いなど、途切れることなく語ってください。自分が生まれ育った町への懐かしさ、愛おしさが十分すぎるほど伝わってくる。

同級生が経営するホテル。そこには既に多くの学友が集まっていた。前夜ながら、その場はすでに同窓会。何十人もの学友が歩み寄り、握手を交わし、昔話に花を咲かせる。

80歳になった同級生たち。しかし、まるで高校生が集まったかのような若々しい熱気が絡まり合い、会場全体を包み込む。皆が皆、徳之島を愛し、友情を大切に、一人一人への思いやりを積み重ねてきた結果がこの場にあるのだ——本来ならば立ち入りを許されない、部外者の私も強く感じた。お客様自身も、ご自宅での様子とは全く違う生き生きとした姿。心が元気になれば、体も元気になれるのだ。

無理だという判断を下すための理由はたくさんある。でもそれは本当に無理なのか。乗り越えることはできるのではないかな。事実自分はこうしてここにいる。数々のハードルを越えてきたお客様自身が、強くそんな思いをかみしめているようだった。

エスコートヘルパー 小倉 譲



行程

- 1日目 同行スタッフがお迎え
伊丹空港到着
鹿児島空港を経由し、徳之島へ
- 2日目 お墓参り
親戚のご自宅まわりへ
同窓会への参加(中学)
- 3日目 友人宅を訪問
同窓会への参加(高校)
- 4日目 ホテル出発
徳之島空港到着
伊丹空港到着
介護タクシーにてご自宅へ

メモ

介護認定：要介護4
障害認定：1種 1級
年齢：78歳
行き先：徳之島
同行：エスコートヘルパー1名





旅行の事例③

いつまでも自身を磨き続ける人生 そのお手伝いをさせていただける幸せ者の目から



たつの市に住むKさんは今年米寿のお祝いをしたばかりの88歳男性。以前は小さな町にある唯一の診療所で医師として勤めていた。半生をこの町に捧げたと言っても過言ではないだろう。この町に住む人のほとんどが、病気になればKさんに診てもらった。

退職後は隠居してのんびり、という暮らしを選ばれてはいないKさん。興味の対象も広く、様々なジャンルの講演会や研究会に出席するなどして勉強を続けた。また地元のライオンズクラブの活動でも精力的に動き回った。地域に貢献するという意欲が衰えるようなことはなかった。

そんなKさんの生活に突然、大きな変化が訪れた。くも膜下出血で倒れ、その手術後は杖を使って歩くようになった。が、それでもKさんの外出機会は減ることはな

かった。周囲の心配をよそに杖歩行で歩き回った。転倒を心配し始めた奥様からしゃらくにお電話をいただいたのは、術後しばらく経ってからのことだった。以来、ヘルパーの同行を伴う形で3ヶ月に1度ぐらいのペースでお出かけを続けている。

地元ライオンズクラブの親睦旅行

地元ライオンズクラブの親睦旅行に参加。行き先はマカオ。約4時間半という飛行時間を心配する方もいらっしゃいましたが、準備がしっかりできたこともあり、機内で大きな問題は起こりませんでした。現地での観光はタクシーを利用。世界遺産の一つ、セナド広場や聖ポール天主堂跡、媽閣廟などをまわったほか、街中を車いすで動き回りました。驚いたのは街の人たちの車いすの人に対する対応のすばらしさ。





タクシーを降りる際には「何か手伝いましょうか?」と声をかけてくれたり、横断歩道を渡ろうとする際には私たちが横断するだいぶ前からしっかり停車して待ってくれたりしていました。これにはKさんも感心することしきりでした。

最終日、最後の食事は李康記飯店でメンバー全員とお食事。おいしい中華料理を食べながらみんなでわいわい楽しく過ごしました。Kさんの現役時代、町のみんながKさんのお世話になったことや、穏やかで紳士的なふるまいで今でもみんなから慕われていることなどを聴かせていただき、私までうれしい気持ちになりました。今回は今までで最も遠い場所でしたが、Kさんも終始お元気で本当に楽しい旅行でした。

大阪での同窓会

この日はKさんの旧制中学の同窓会に大阪までご一緒しました。ご自宅から最寄りの駅までタクシー、その後電車で梅田まで。駅から会場のホテルまでは再びタクシーを利用しました。集まったのは今年88歳になる方々20名ほど。とてもそうは思えないほどお元気な方ばかりでした。Kさんも久しぶりの再会に頼も緩みっぱなし。旧友との再会で小さい頃の様々な記憶が蘇ってきたようで、帰りの電車の中では昔話をたっぷり聴かせていただきました。



エスコートヘルパー 須貝 静



行程

1日目

ご自宅を出発
関西国際空港到着
マカオ国際空港到着
ホテル到着、宿泊

2日目

ホテル出発
マカオ市内観光
李康記飯店で夕食
ホテル宿泊

3日目

ホテル出発
マカオ国際空港到着
関西国際空港到着
ご自宅にご到着

メモ

介護認定：なし
障害認定：なし
年齢：88歳
行き先：マカオ、大阪ほか
同行：エスコートヘルパー1名

